

飢えた家畜どものサファリパーク

——愚行の社会学（四）

内藤 潔
澤野 雅樹

一 奴らを高く吊るせ——電腦殺戮ツールの誕生

梅雨時のある日、満員の電車で揺られながら仕事場に向かっていた。車内を見渡せば、手鏡を睨みつけて化粧に励む女性や、枝毛を筆って床に捨てる女子高生が目を惹く。何かを必死に嚙下して涙ぐむ会社員風の男性もいれば、肌を刺す湿気をもとめせず緊密に抱き合い睦言を囁く男女もいる。ドア付近にたむろする連中は降り降りを渋滞させる要因を作っていないがまるで上の空だ。同じ空間を共有する彼らの誰もが距離を接した他者の物質的な厚みがまるで眼中にないかのように振る舞っている。

都市に特有の他者への無関心は、前近代的な共同体の濃密かつ緊密な人間関係に比較すれば希薄であるのは言うまでもない。しかし、リチャード・セネットがかつて指摘したように、我々は都市の無関心によって初めて他

飢えた家畜どものサファリパーク

者の視線から解放され、自由な空気を吸うことが出来るようになったとも言える。

実際、車内で共生する者たちは、他者の眼差しや関心を避けるように、あるいは新聞や文庫本の文字を必死に追いかけて、あるいはゲーム機や携帯電話のディスプレイに視線を落とし、各人が自分の世界に逃げ込んでいるように見える。無論、都市にいるという理由で突如、他者への関心を失ったというわけではない。それは彼らも他者の目を避けて逃げ込んだ先でどんな振る舞いに及んでいるかを考えれば容易に分かることだ。

二〇一三年六月二五日、東北の某県会議員の男性（五六歳）が自ら命を絶った。彼が日頃から通院する県立病院への批判をブログに書き込んだところ、非難が相次ぎ、所謂「炎上」状態になってしまった。慌てた議員はすぐにブログを閉鎖し、さらには謝罪の記者会見を開いて「不適切であった」と陳謝した。ところが会見から一週間後、行方不明となった議員は、翌朝、遺体となって発見された。数日前から食事もし喉を通らないと近親者に話しており、現場の状況からも自殺の可能性が高いとされた。

先ずは「炎上」のきっかけとなった議員のブログを見てみよう。健康診断の検査料を支払う際、名前ではなく番号で呼ばれたことに腹を立て、その顛末をブログに書き込んだことが事の始まりであった。

「ここは刑務所か！^{○△}名前を呼べよ。なんだ241番とは！と受付嬢に食って掛りました。会計をすっぽかして帰ったものの、まだ腹の虫が収まりません^①」

帰宅後、さらに苦情を言おうと病院に電話を掛け、事務長を自宅へ呼び出す。だが、今度は訪れた事務長の応対が気に入らなかつたらしく、再び激昂した。こうした遣り取りの書き込みとともに、病院での支払い時に、精算計算が出来たのでカウンターまでお越しく下さい」と呼び出されたことにもなぜかご立腹だったらしく、その様子も書いている。

「……こちらは15,000円以上の検査料を支払う、上得意のお客さんだぞ。そちらから、本日は有難うございました。」とカウンターの外に出て、長椅子に座っている患者の方に来るべきだろうが……」

よせばいいのに、立腹のあまり検査料を支払わずに帰ったことをまるで手柄話か何かのように書いてしまった。その上で「このブログをご覧の皆さん私が間違っていますか。〇〇県立〇〇病院（ブログでは実名）が間違っていると思いますか」という問い掛けを全国、いや全世界に発信してしまったのである。

すぐに反応はあったが、当初のコメントは「老害きた!」とか「馬鹿だな」といった程度の非難であった。しかし過激化するのに多くの時間を要するはずもなく、「辞職を求める市民の会」が立ち上げられると、「正義」の鉄鎚とばかりに大炎上の事態を迎える。

「権力と馬鹿を足して人間性を引いたクス」^②

「意見したければ最低限のルールは守れ」（検査料を支払わずに帰ったことを非難して）

飢えた家畜どものサファリパーク

「こんな奴議員になる資格ないわ」

この辺りまではまだ穏当な範囲の抗議なのだが、徐々に過激なものへ変化していく。

「病名が不治の病だったら面白かったのに」

「土人が多い田舎ではクズどもが結託して仲間の一人を当選させ……」

その後には、次のような扇動する書き込みも増えた。

「みんなでコイツを削除しようぜ」

「おまえら知事とか県議会にクレーム入れた？……知事への意見としてそのまま叩き込めるからドンドンいけ」

「こいつの今回の発言と騒動は、軽い炎上程度ですますべきものじゃないな。数々のサイトへ拡散、炎上をひろげて辞職、老後の人生破壊までしてほしい。ただの馬鹿なんだけど、なんか尋常じゃないくらい腹立つわ。少なくとも、私はこの議員のブログ内容定期的にアップする」

「このキチガイどうなるの辞職だけじゃなまぬるいよ」

この扇動における残忍かつ暗い情熱は何によって突き動かされているのだろうか。よくわからない。炎上状態になってくると差別的な書き込みが急速に増えてくる。

「すぐカッとなる国の人？」

「早く逮捕しろよこの朝鮮人」

「てめえ、部落から出てけよ！」

「きつとコイツの子どもクス」

「奴隷か乞食しかおらんかな、トーホグは」

これら野卑なコメントが群れを成して現われたら、もうブレイキは効かない。日常生活では使った本人ですら躊躇うであろう語彙の濫用、すなわち「糞」「キチガイ」「死ね」「チョン（民族差別用語）」「ゴミ」「田舎モン」「痴呆議員」「犯罪者」「万引き」「バカ」「人間のクス」等々、ネットを隠れ蓑にした罵詈雑言のオンパレードである。もちろん「基地外」「氏ね」といったネット村に特有の当て字を用いた悪意の表出にも事欠かない。

それにしては件の議員の書き込みは、これほどまで激しく執拗に攻撃されるべき問題だったのだろうか。炎上後の謝罪記者会見が全国ネットのテレビで報じられ、議員は居並ぶカメラの前で「公人としての立場を忘れ、著しく思慮に欠け……治療費は払った。病院の慣行や歴史を考えず、不適切だった」と陳謝せざるを得なくなっていた。しかし謝罪というが、無論、支払いを済ませた以上、犯罪に該当する何かが残っているわけもなく、特

定の他者に対する危害や侵害が明白にあったというわけでもない。敢えて挙げようとするれば、絵空事の「仁徳を備えた議員」といった理想像を毀損したという程度でしかない。

県議は番号で呼ばれたことに激怒したが、病院が番号を使って患者を呼ぶのは、名前の聞き違いが多いのと、個人の特定と病気内容の推測を防ぐという個人情報保護のためである。番号で呼び出した上で個人名による再確認というダブルチェック法は、患者の取り違えが一大事になりかねない大病院にはむしろ合理的な工夫と言える。彼はそのような事情を単に知らなかったのか、さもなければ県議というステイタスには常日頃から多大な敬意が払われて然るべきと思いがついていたのかもしれない。たとえその通りだとしても、愚昧さや傲岸さは報いを受けるべき咎ではなく、片頬で軽く嘲笑する程度の特徴でしかない。況んや全国放送で謝罪の光景を流すほどの問題ではあるまい。

この種の軽率な勇み足は、中途半端な「実力者」にはありがちな話であり、特に興味深いところもない。残念な点があるとすれば、愚昧の表出か傲慢の証に過ぎない見解を絶対の正義とばかりに結晶化し、公衆の面前に晒したことからいである。その結晶を他の面から見ると、権力側の人間が弱い者いじめをしている構図が浮かび上がり、さらには議員の胸の奥に巣くう（やもしれぬ）悪しき選良意識が透かし見えるというわけだ。その構図が事実か否かは問題ではない。ネット上でそう捉えられた、より正確さを期せばそう捉えた方が面白いと感じ取られた——こうして独り合点の「正義」はまんまと悪意の罠に落ち、蚊柱のような不定形かつ流動的な悪意の壁に取り囲まれる。「アホはツイッターやっちゃ駄目」「ブログで自爆するような馬鹿だっただけ」等々。

さらには「激怒する理由が理解不能」という書き込みもあった。だが本当に理解できないのだろうか。居並ぶ

「理解不能」の輩は、分かりもしないのに罵倒の列に並び、毒を吐いていたのか。いや、彼らは理解できないのでもなければ理解しないのでもない。些細なことで怒りの感情を露わにすることなど実に凡庸なことであり、街中のケンカも大半は取るに足りない理由から始まるものだ。そうした平凡な心理を解し、付け込む余地があると判断し、しかも勝ち目があると踏んだからこそ悪意の礫を投げつけ、排除に向かったのだ。

遺体発見が報道された後には、次のような書き込みもあった。

「豆腐のようなメンタルの人間ほど高圧的、攻撃的というのがよくわかった。死人に鞭打つようで悪いが同情できない」

「自殺しちまったが、全く同情出来んわ完全に自業自得」

「ネットで炎上し追い込んだ自殺とテレビが言うのは違和感があるなあ。指摘したのはネットでも自宅^{マダ}まで追い込んだのはテレビじゃないの」

死者をなお鞭打つ冷酷な眼差しは、無論、議員の暮らす地元の共同体の成員たちのものではない。むしろ彼に会ったこともない者たちのもの——すなわち電車内で他者の眼差しから逃れるように目を伏せ、ディスプレイに食い入っていた者たちのものである。人はいつしか社会空間における慎ましきからは想像し難い態度をネットで晒すようになった。その証拠とでも言うべき記事を紹介してみよう。そこには「復興庁・幹部ツイッター暴言」「左翼クソ」「懸案曖昧に」という見出しが踊っていた。以下に引用する——ただし個人名はイニシャルに変更

してある。

「復興庁で福島県の被災者支援を担当する幹部職員が個人のツイッター上で『国家公務員』を名乗り、課題の先送りにより『懸案が一つ解決』と言ったり、職務上関係する国会議員や市民団体を中傷したりするツイートを繰り返し返していたことが分かった。政府の復興への取り組み姿勢を疑われかねないとして、同庁はこの職員から事情を聴いており、近く処分する方針。

この職員は総務省キャリアアのM・復興庁参事官（45）。千葉県船橋市の副市長を経て昨年8月同庁に出向し、東京電力福島第1原発事故で約15万人が避難する福島県の支援を担当。超党派の議員立法で昨年6月に成立した『子ども・被災者生活支援法』に基づき、具体的な支援策を定める基本方針のとりまとめに当たっている。

M氏は今年3月7日、衆院議員会館で市民団体が開いた集会で、同庁側の責任者としてとりまとめ状況を説明。同日『左翼のクソどもから、ひたすら罵声を浴びせられる集会に出席』とツイートした。翌8日には『今日は懸案が一つ解決。正確に言うと、白黒つけずに曖昧なままにしておくことに関係者が同意』と、課題の先送りを歓迎するかのような内容をツイートしていた。

ツイートはM氏が現職に就いて以降、分かっただけで計約600回に上る。以前は本名でツイートしていたが、昨年10月からは匿名に切り替えた。

実際に同法を巡っては、支援の対象とする地域の放射線量の基準が決まらないことから、成立からほぼ1

年がたつても基本方針がまとまっていない。根本匠復興相は3月15日、基本方針と別に同法の趣旨を踏まえた支援策『被災者支援施策パッケージ』を発表したが、成立に関わった国会議員や期待していた市民団体は、内容が当初の想定から後退しているとして『骨抜きだ』と批判していた。M氏はこれらの国会議員や閣僚に対しても文脈から相手がほぼ特定できる形で『ドラえもん似』『虚言癖』などと中傷していた。

M氏はツイートの真意をただした毎日新聞の取材に『個人でやっている』『記憶にない』とだけ繰り返し、コメントを拒否。その直後、ツイッターのアカウントを削除した。復興庁は重大な事案だとして事実を確認中で、『結果などを踏まえて適切に対処したい』⁽³⁾としている。

この一件が教えてくれるのは、ネットにおける「殺戮」が、何も無名の弱者が群れ、日頃の鬱憤を晴らすべく強者の落ち度を穿鑿し、名誉を傷つけ、高い地位から引きずり下ろそうと執拗に責め苛むといった、分かり易い現象ではないことだ。むしろ、公の立場があるうがなかるうが、誰もがそこでは名前を失い、匿名の怪物と化して持てる攻撃性を存分に吐き出していたのである。

こうして名前のない暴言が固有有名を包囲し、名前から力を削ぎ落とし、死に至らしめるまで続いた。言葉による殺戮の痕跡は今もそこに残されている。彼らは、ウェブの私営検閲官となつて見知らぬ他者の行状を穿鑿し、同志に密告し、些細な失言を醜聞として公に晒し、おまけに背後から刺すことさえ辞さなかった。

彼らの血走る目は、明滅する画面に浮かんでは消える、一度として会ったこともない他者の茫漠とした姿に向けられた。知り合いの暑苦しい穿鑿の眼を逃れ、都市に到着した者たちは、やっと無関心に紛れたはずなのに、

なぜか宵闇とともに広がる識別不可能な時空から他者を選別し、祭壇に捧げ、磔を投げ、矢を射たのである。

その醜悪な有り様は私刑そのものであった。加害者側が咎められる虞れない公開私刑である。圧倒的な多数者が血眼になって餌食を探してネット空間をうろつき、獲物を探し当てたら正義の名において制裁を加え、排除を企む。異質な人や集団を狩るという、究極的には抹殺まで行きかねない他者の排除——それを単純に面白がり、差別し見下すことで自尊心を満足させたりする、そうした集団リンチである。

私たちは、醜悪な殺戮劇を再演することで他者を嘲笑い、自分らを免罪しようとは思わない。その逆だ。我々人間という因果な生物は、中世の魔女狩り、ホロコースト、人種差別、民族浄化エスニク・クレンジングから小中学生のイジメに至るまで、世界中のあらゆる場所で何度もリンチを繰り返してきた。我々には他者の苦しむさまを見て悦ぶという救い難い本性がある——人間には固有の暗く残酷な駆動系に繋がる精神の回路が搭載されているのである。ミシェル・フーコーは人種主義について次のように指摘していた。

「実際、人種主義とは何なのでしょう？　まず、それは権力が引き受けた生命の領域に切れ目を入れる方法なのです。そうやって生きるべき者と死ぬべき者を分けるのです。人間種の生物学的連続性において、諸々の人種が現われ、人種間の区別やヒエラルキーが設けられ、ある人種は善いとされ、ある人種が反対に劣るとされるなどして、権力の引き受けた生物学的な領域が断片化されていくことになるでしょう。人口の内部で、様々な集団をたがいに引き離していくわけです」⁽⁴⁾

国家への愛と同様、人種や民族の夢はノスタルジックな憧憬以外の何ものでもない。言い換えるなら、夢はそれを掻き抱く者たちの動機がなければ、すぐにも蒸発し、消滅してしまうものなのだ。だから儚く、頼りないのではない。掻き抱こうにも空振るしかない希薄さが逆に夢を共有する者たちの結束を強くするのである。互いの目に映る希薄な霧は、こうして堅固な実体であるかのように映し出されてゆく。

いつの頃からか、東京の山手線新大久保駅の周辺で在日コリアンに対する排斥デモが繰り返されるようになった。「在日特権を許さない市民の会」（略称…在特会）のネット上の呼び掛けに呼応して、地方からも多数の若者が集まるようになったのだ。この活動に対して「レイシストをしばき隊」という反対団体が生まれ、デモの集合場所で「在特会」と衝突し、両団体に八人の逮捕者が出た。

韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチは取り立てて新しい現象ではないし、差別や偏見も潜在的にはまだ残っているだろう。しかし、在日特権によって日本人の一般市民が被害や損害を被る事態もないはずだ。最近の竹島問題に端を発する関係緊張を背景にした相互嫌悪の昂進や、従来からの近親憎悪的な感情があるにしても、わざわざ東京に集合して排斥運動を繰り返さねばならぬほど差し迫った問題とも思えない。

「在特会」のデモの様子を見ると、憎悪の感情を剥き出しにした集団的興奮状態に陥っていることが分かる。そこにいるのは我々が歴史上何度も見てきた他者を貶めて自尊する定番の安っぽい騒擾であり、いかにも低次元の扇動に乗せられ、エスカレートした人々の姿だった。昨今は彼らのことを「ネットウ」（ネット右翼）と呼ぶのだそうだ。だが、彼らに右翼思想の研鑽に励む様子は見られない。大声で「朝鮮人は皆殺し」というようなシュプレヒコールを繰り返し、攻撃に酔い痴れ、興奮しているだけだ。所定の敵カテゴリーへの集団的な攻撃と熱狂

に酔い痴れる点で、プレミア・リーグのフリーガンの姿を彷彿とさせる。彼らの目的は表面上はカテゴリー化された敵の排除にあるように見えるが、実際にはそうでなく、飽くまでも群れ、熱狂する者たちの即時的な充足にある。ただ酔い痴れる多数者による集合行為は、その場で完結するものであり、大昔から繰り返し行われているものだ。時にさしたる方向性を持たない騒ぎが巨大なベクトルを形成し、「水晶の夜」のような爆発に至って、歴史的な変動に関わることもないではないが、だからといって新大久保の運動が運動それ自体として特に目を惹くわけではない。

しかし、数を持つんで何かをしようという明確な意識がなくなると、短時間のうちにこれだけ多数の人々が集まれば、そのこと自体が標的（攻撃目標）に設定された他者には大きな脅威となる。問題は、それゆえ質ではなく量であり、一度のデモが集合メカニズムとして働き、さらなる動員に結びつく点にある。他者排除が幼稚な罵詈雑言や散発的な示威に収まっているうちはまだましなのだが、過激な扇動の言葉を契機に憎悪の集塊が生まれると、忽ち他者排除の運動が巻き起こる。

それゆえ人の死を願う運動が新大久保で起こるか、ネット上で展開されるかは本質的な問題ではない。また、生き残るべき「人種」と死すべき「人種」とを分かつ線分が既存の国境や言語、共同体を分かつ境界に正確に重なり合うわけでもない。むしろ私たち現代人にとって、公的な言語が特定の人々を指して「生きるべし」と命じ、残る者たちに「死ぬべし」と命じる場面を目撃する経験はないに等しいだろう。とはいえ、公的に「死すべし」と命ずる場面が見られないというだけであり、分割は既に完了し、あとは視野の隅で餌食が「死」の崖を落ちてゆくのを確認するのみ、という段階になっていないだろうか。生と死を分かつ分割線が、私と隣人の間に引かれ、

私と隣のクラスメートの間に引かれ、昨日の恋人との間に引かれる時、私たちは殺し、あるいは見殺しにする快楽に興奮を隠せなくなっているのではないか？ フーコーは先の文章に続けて次のように述べていた。

「普遍的に保障的で、普遍的に安全で、普遍的に調整的で規律的な社会が現われると同時に、この社会を通じて、殺人的権力が、つまりあの殺すという古い主観的権力がもつとも完全な形で解放されるのです。ナチス的社会の全体に行き渡るこの殺す権力が発現するのはまず、殺す権力、生殺与奪の権力が国家だけでなく、一連の諸個人や相当数の者たち（SAやSSなどがそうです）に与えられているからです。極端なことを言えば、ナチス国家においては、誰もが隣人の生殺与奪権を持っているのです。告発するだけで、そばにいる者を実際に殺す、あるいは殺させることができるのですから」^⑤

不確定性原理で有名なヴェルナー・ハイゼンベルクは、同業者による密告により連行され、執拗に尋問された経験を生涯に互って忘れることが出来なかった。彼の妻の証言によれば、第二次大戦後もしばしば夜中にうなされ、飛び起きたという。彼の場合、母親がたまたまナチス高官のヒムラーの母と親しくしていたお蔭で収容所送りを免れた——そのような奇遇がなくなっていたか知れたものではない。また、戦後の冷戦時代、ソ連の水爆実験の中心人物となった物理学者、レフ・ランダウもまた若き日々に作ったピラのため、スターリニズムの餌食となり、投獄され、以降は終生、権力に怯え続けた。

もちろんナチズムやスターリニズム以前にも、密告や陰謀によって命を奪われた才能は、エヴァリスト・ガロ

アやアントワヌ・ラヴォアジエの名を挙げるまでもなく、枚挙に暇がない。生き残って然るべき生命と速やかに朽ち果てるべき生命とを分け隔てる境界は、告発や密告による分割線が引かれる前から既にあったというわけではない。況んや特定の民族間に始めから引かれているようなものでもない。むしろ、いつ、誰が密告や告発をするか分からないし、いつ、誰が逮捕・拘留されていなくなるのか分からない不安と恐怖の内に何度となく引き直されるのである。

ハイゼンベルクやラヴォアジエはユダヤ人ではないが、同業者の嫉妬や怨恨を甘く見ていた節があるし、ランダウは屈託のないスターリン批判を些か無邪気に考えていたのかもしれない。それら以外に咎があるとすれば、彼らが他者からの激しい嫉妬や根深い怨恨に値するだけの才能に恵まれ、相応に高い地位やポジションに就いていたことくらいだろう。

いかにも現代の徒花と言わねばなるまいが、殺す快楽の蓄は今や個別的な嫉妬や怨恨が介在しなくとも開花し、怪しげな実を結ぶ。相手に些細な落ち度さえあれば十分であり、それが誰であっても構わないのだ。地方の県会議員であれ、外食産業でアルバイトする大学生であれ、付け入る隙があれば、飛びつき、群がり、寄ってたかって攻撃を繰り返す。

興味深いのは、一度も会ったことのない他人に対して私的な感情を爆発的に吐き出せるということである。かくも多くの人々が、どうして議員の書き込みのような些細な事柄や、ネット上の煽りに群れを成して反応したのだろうか。その理由はどうか、最新テクノロジーの問題ではなく、人間を貫く本性ともいえる問題に繋がっているようだ。すなわち、遊びの癒悦と集団内定位への欲求である。

ネット掲示板を開いてみれば誰にも分かるように、そこは何よりフォーマルスーツを脱ぎ捨てた野獣たちが一時の「退屈凌ぎ」に耽る憩いの場である。いや、制服を着込んだままでもいい——車内の伏目がちな人々はディスプレイを覗き込んだ瞬間に社会から目を背け、社交性をもかなく捨てる。外観上はしっかりスーツを着込んでいるが、精神の社交辞令は早くも道路脇に打ち捨てられている。今や彼らの眼前に広がるのは愚かな裸族の楽園、いわば頓馬のサファリパークであり、彼らが飛び込むのは愚劣な精神が野生状態で飛び跳ねながら、アクロバティックな排泄を披露しては汚物や動物の死骸を投げ合う絶好の遊び場である。電車の中で俄かにキーボードを打ち始めた彼らには、今や最低限の自制心や矜持もなく、世にも稀な不衛生な言葉だけを並べた陳列棚にまた一つ記念碑的な汚物を恭しく飾り立てようとしているのである。

汚物は他者を非難する礫となって被害者に襲いかかるが、建前は「正義」の名の下に行なわれる不正の追及であり、いわば天誅の姿を借りた鬱憤晴らしが定番のスタイルとなっている。攻撃的かつ煽情的な調子に乗って野卑な語彙が次々に繰り出されるが、それらの出所は常に群衆なのだ。雑踏に埋没し、形のない集塊に身を隠しながら、低次元の快楽に耽り、低劣な興奮に身を振る。苦悶する獲物の苦しみが高じ、稀に「死」の落し穴に身を投じたりすると、名もなき部族の楽しみはいよいよ最高潮に達する。そして、ディスプレイから目を離し、ベッドに入る頃には汐が引くように興奮は醒め、愉悅の微かな余韻だけが残る。陰湿な祝祭が幕を閉じる時期は限界効用説に従う——言い換えるなら、見知らぬ他人を血祭りに上げる仮初めの供犠は、加害者の存分な堪能の刻が訪れるまで終わらないのである。

前出の書き込みを思い出して欲しい。「…老後の人生破壊までしてほしい。ただの馬鹿なんだけど、なんか尋

常じゃないくらい腹立つわ……」あるいは「……そのまま叩き込めるからドンドンいけ」

この「血祭りに上げる」心性が厄介なのは、好きでも嫌いでもないのに快楽に酔うために嫌悪を偽造し、それを繰り返して声高に表明することで憎悪に昇格させながら、もう一方では落ち度を罪悪に昇格させることによって処罰の正当性を手にし、殺戮の快楽に耽ろうとするからである。快楽はより一層の快楽を求め、他者に対する一方的な糾弾と低次元の感情放出が連鎖して過激さを増しながら、さらなる歓びをもたらず。遊び盛りの少年少女たちのいじめが過激化してゆく過程を見ても分かるように、遊びは残酷なほど楽しく、だからこそ多くの文化が供犠に熱狂し、人々は血祭りに恍惚となってきたのだ。

もちろん件の議員のブログにしても怒りの捌け口として鬱憤晴らしに、つまり血祭り心理の勢いのままに書かれたのだろう。一步間違えればそれが病院の誰かを血祭りに上げる契機になったかもしれない。正義と快楽の入り交じる領域では、面白さの増進をめぐつて誰もが加害者の群れに加わることが出来る一方、すぐにも被害者のポジションに転がり落ち、そのまま犠牲者になりかねない。たとえ祭壇に上げられる順番がいつ自分に回ってくるか分からなくとも、みんなと一緒にたつて利根的な快楽に酔い痴れることは止められない。何故なら人間は集団でしか生きていけないし、愉悦は集団の中にしかないのだから。

人は集団内の定位を志向し希求する限りにおいて、集団の内的な価値に同調し、他のメンバーとの「同一性」に価値を見出そうとする。その一方、内部でより優位な地位を確保するには、己が他者より秀でていることを示す「差異」の提示に努めなければならない。両者をともに実現するには自己規定と集団内他者の承認が必須となる。この点は現実の生活空間とネット空間とを問わない。

情報技術の発達は、多数多様な相手へ発言することを技術的に可能にしただけであり、個々の人物を人間として成熟させたり、人々の相互理解を深めたりしたわけではない。情報の双方向性が飽くまで技術的な水準で確保されただけであり、人はただ好きな時に好きな相手とだけ、好きなことを言いつ放しに出来るようになっただけなのだ。「炎上」に見られるように、実際には「遮断」の自由度が増しただけで、互いに一方通行の度合いを強化し合える回路が出来上がっただけのことである。

ネット空間は、空間と言いつつも現実世界の座標から完全に切り離された異次元の空間である。そこには物理的に計測可能な距離も広がりもないが、社会空間に似た関係の広がりが形成されている。しかし、そこは異空間であり、現実世界のダストシュートと化したのか、実際の社会では滅多にお目にかかれない悪意が大量に打ち捨てられ、堆積している。かつて悪魔崇拜が神と天使の秩序を地獄で逆さまに反復していたのと同様、ネット空間においても（それが権利上、無限の広がりをするのであれば余計に）表の空間における価値を戯画的に転倒した集団性が現われるのは必至だった。そこでは根深い悪意が集団の価値となり、人は互いの悪意と憎悪を確認し合い、匿名の言語が餌食の探索と殺戮行為によって切り結ばれるようになる。異界の供犠はもはや神聖でもなければ莊嚴でもない——日常的であり、道徳的であり、正義感に溢れている。生憎、異空間では人の傷口を無限に広げることが出来る。人を貶め、死を言祝ぐ人々は、奇怪なまでに口汚い言葉を使うけれども、しかしながら「悪魔」などという大それた存在ではなく、むしろ卑小な生物であり、いつも常識の陰から叫ぶ幼稚な正義漢ばかりなのだ。

二〇一二年一〇月、米国のオバマ大統領が、陸、海、空、宇宙に続き情報空間を「第五の戦闘空間」と見なし、これまでのサイバー攻撃に対する防御姿勢を改め、攻撃準備を整えるように指示した。大国が戦争の準備を進めるその傍らでは日々集団リンチに励む小動物の群れがいる。その情けなさへの悔恨からか、はたまた事態の重大さに慄いているのか、今日も今日とて誰もがケイタイ・スマホに敬虔な祈りを奉げるように頭を垂れている。

二 告発の行方——不幸を巡る「罪と罰」の方程式

二〇一二年八月一日、東京電力福島第一原発事故について、業務上過失傷害の疑いで当時の政権を担った菅元首相と海江田元経産相および枝野元官房長官が告発された——一年以上の審議を経て二〇一三年九月一〇日、結局は不起訴に終わった。告発した市民団体は、元首相が東日本大震災の翌日に現地視察を強行したため、原子炉格納容器内の水蒸気を放出して圧力を下げるためのベント（換気）が遅れ、被害が拡大したと主張していた。これに対して菅元首相は検察当局へ意見書を提出し過失はなかったと述べた。また検察当局が任意の事情聴取を打診したところ、首相として遂行した行為について聴取に応じるのは不適當であると拒否したという。検察当局は起訴に相当する刑事責任が有ったか否かを判断しなければならなかったわけだが、専門家たちから聴取した意見、すなわち津波による被害予測は困難であり、刑事責任を問うのは難しいという大方の判断が覆ることはなかった。

二〇世紀末、奇妙な仲良し集団が形成されると、彼らは数十年という短期的な——廃炉に要する費用や放射性

廃棄物の処理および貯蔵の費用を含まない発電直接コストの——経済優位性とクリーンな「夢のエネルギー」という二本立てのお囃しを踊り、原子力発電の危険性をすっかり覆い隠してしまった。役立たずの京都議定書に唯一効果があつたとすれば、Tom Zoellnerが指摘するように「何としても炭素排出量を減らさなければならぬ」という非常事態の意識が、ウランの核分裂では温室効果ガスが出ないという単純な物理学的事実を以てして、核エネルギーを必要不可欠なものにしてしまった」ことであり、その疑わしい趨勢は、ガイア仮説で有名なジェームズ・ラブロックなど転向した環境主義者たちの声高な原子力賛美を契機に膨れ上がり、先ずは元アメリカ副大統領のアル・ゴアを巻き込み、次いで日本でも鳩山由紀夫など政治的な実力者が次々に賛同し、福島事故以前から拡大するばかりだった。⁽⁶⁾とはいえ、気候変動における地球の全域的な温暖化という仮説が怪しいばかりか、その原因を有史以来漸進的に減少の一端を辿ってきた二酸化炭素の一時的な増加現象に押し付けるといふ強引な説にも疑惑が向けられるようになるに従い、慎重な科学者やジャーナリストは「温暖化」という語彙すら使用を避けるようになっていた。「夢のエネルギー」説は、廃棄物処理の問題も絡み、福島以前に既に「疑惑のエネルギー」の面を持ち始めていたが、まだ環境主義者の掌返しの大技をひっくり返せるほどのまとまった力はなかった。

それゆえ、もしも日本政府に意図的な隠蔽の事実があるか、または国内外を問わず世論を誘導したという事実があれば、その責任を問うべき相手は国家と考えるのが当然であろう。とはいえ、我が国の裁判制度では、個々の政策がもたらした被害（帰結）について国の責任を問い、損害賠償を勝ち取ることは可能であっても、例えば経済性への極度の傾斜や、根拠のあやふやな仮説に依拠して世論を誘導し、エネルギー政策の根幹に原子力を据

えるといった、国家設計上のコンセプトを「悪」として、国を思想犯の如く裁くことは現行の裁判制度の下では、原理的にも実際にも不可能である。

それでも件の市民団体は国の責任を追求すべきと考えた。そして可能な限り最もインパクトがある方法で糾弾したかったのだろう——政府の最高責任者を刑事犯として告発する。これほどインパクトのある方法ほかに無い。福島第一原発事故を事件として、どうしても刑事責任を問うというならば、因果関係を明らかにし得る具体的な出来事を特定し、具体的な個人を被疑者として告訴しなければならぬ。そこで元首相ら個人を相手取り、事故対処の極めて具体的な場面を切り取って唯一適用できそうな業務上過失傷害で訴えた。直接的に国家の過ちを糾したり責任を問えないのなら、権力の座にあった生身の人物を告訴対象とすることで搦め手から国の責任を問おうというのが、市民団体の戦術なのだろう。では、その業務上過失傷害とはそもそもどのような罪科であり、またどのような戦術として使われるのだろうか。

過失により他者を傷つけると過失傷害罪に問われる。継続的に行なわれている仕事や業務上の行為において払って然るべき注意を怠った結果、他者に身体的損傷を蒙らせた場合には、一般の過失よりも刑が重い業務上過失傷害罪に問われる。要するに、悪意がなくとも失敗すれば刑罰を与えられる可能性があるということだ。事故が発生して被害者が存在すれば、そこには必ず責任を負うべき者、つまり処罰されるべき人物が存在するはずであり、しかも行為の経緯と被害の結果が同等だとしても素人より玄人の方が罪過の根が深いという、何とも不可解な論理から生まれた罪科が「業務上過失傷害・致死罪」である。

原告の言い分はこうだ。非常時に首相の仕事を放り出してノコノコと現場に出かけて行き、よせばいいのに換

気装置の作動を妨害した結果、放射性物質の拡散という形で被害の拡大を招いた。無論、元首相ら為政者に責任がないとは言えないにしても、被害の直接的な責任を問うには無理がある。それでも検察は、想定加害者の行為が被害者の受傷に直接的な因果関係が有るか否かの点において法の適用可能性を検討した。多少の無理があっても、検察当局が起訴の是非を検討しなければならなかったのは、告訴が業務上過失傷害罪の根底論理を前提とした罪科の構成要件を外形的に満たしていたからである。

先ず第一に、被害者がいる以上、加害者も必ず存在しなければならないという原則がある。第二に、正しく行動すれば問題は発生しないという原則が充たされなければならない。その上で、正しい行動の不採用が招いた事態が組上に載せられる。意図的な判断と不幸な事態との因果連鎖が明白ならば、処罰に相当する不正義があったとの論理式に適った外形が整えられ、それゆえ告訴は受理されたのである。出来事には「被害者・加害者の二者関係」が必ず存在し、しかも人の行為には遵守すべき「正しい基準」が存在するというのがこの論理式のベシックな前提であり、その上に、安寧を乱す行為にはそれが過失であろうとも罰を与えるべしという社会統制の論理式が組み上げられている。だから検察当局もこの論理式に具体的な状況や行為を代入して刑事責任の有無を検討するのである。

過失の有責性は注意義務が生じる業務の範囲に依存し、量刑は結果の重大性と想定加害者の業務に対する「玄人度」、つまり経験の深度が反映される。ところがその業務にどこまでの注意義務が付随するかは曖昧であり、また当事者に求められる注意の質や量も曖昧である。しかも業務における玄人度の計量も容易ではなく、当事者の行為が業務の範疇に収まるか否かも曖昧な場合が少なくない。だから、この罪科は業務における有責性の判定

をめぐって幾らでも拡大適用することが可能であり、時として他者統制の場面で戦術的に使われる。「被害者・加害者の二者関係」と「正しい基準」という二つの前提を不動点として、すべての出来事を法論理的に整序することが市民による国家責任の追及ばかりでなく国家による社会統制にも使い回されるというわけである。

しかし生活世界は法律家が想定するほど明晰な外延を持っていないし、現実アモルファスな内容に満ち、「正しい基準」が綺麗に嵌まることなど滅多にない。にも拘らず、社会の安寧秩序を乱したら、過失であろうとも例外なく罰すべしと命ずる法令が成立している。だから当然のように法令は有効活用され、事態を政治的に方向づけようとする際、業務上過失致死・傷害罪による逮捕・告訴は戦術的に運用される。「正しい基準」は本来、科学的な知見の裏付けが求められるが、安寧秩序への希求が基準への信仰に墮し、基礎となる科学的知見への妄信に転化することも少なくない。それが当初の意図に反して社会の安寧秩序を達成するのに却って妨げとなることがある。そうした事例を見てゆこう。

東日本大震災以後、地震予知の学術的成果や報知システムの構築・展開が以前にも増して注目されている。その中で予報装置が時に作動しなかったり、時に誤作動したりと、社会的インフラとしての対地震システムが未熟な段階にあることを示す事象が少なからずあった。たまにマスコミが先走って犯人探しをすることはあるが、地震に関する専門的な知見の未熟さについて、社会の理解は決して低くない。わが国のように不完全という認識が健全な方向で機能し、より一層の研究の深化や制度整備につながればよいのだが、同じ地震国のイタリアではや様子が違った。

二〇一一年五月二五日、地震の予知に失敗した廉で、イタリア防災庁付属委員会の研究者たち七名が最大被災

地ラクイラの地裁において過失致傷の罪で起訴され、翌二〇一二年一〇月には禁固六年の実刑判決が言い渡された。二〇〇九年四月に発生したイタリア中部地震では、六万人以上が被災し、三〇〇人以上が死亡した。ここまですべて被害が拡大したのは、群発地震が続いていたにも拘らず同委員会が大地震につながる兆候がないと判断し、専門家の報告に安心した多くの住民が避難しなかったことに起因するという。その報告の責任を問われて学者たちが起訴されたのである。住民に「避難の必要など全くない」と安請け合いのような安全宣言をしてしまったとか、極端なサボタージュのために「発生が確実」と判断していながら面倒くさくなって公表しなかったとかいうのなら、刑事責任を問われるのもやむを得ないが、そういう状況ではなかった。

そもそも避難するか否かの決定に資するような、例えば一週間以内とか三か月以内といった短期の地震予測は現状では不可能である。しかも各種の実験でも明らかのように、人間には異臭や煙など危険を予感させる情報があっても、その信号が急激に変動することなく、ごく僅かな度合いで漸進的に増える場合、迫りくる危険を過小評価する傾向がある——徐々に温度が上昇する湯から逃げずに茹で上がってしまう「ゆで蛙」に譬えられる。日本では、遠くない将来に南海や東南海あるいは首都直下等々で地震が発生するのは確実と予想されている。ところが時期が中長期的な確率で示されるのみで明確に特定されておらず、防災拠点づくりや飲料や食物の備蓄など一般的防災行動はとるものの、企業や個人が疎開したという話は殆ど聞かない——人間は地震の危険に対して「ゆで蛙」なのである。被災したラクイラの人々も、群発地震が大地震に繋がる兆候だと発表されても時期が明示されなければ、やはりゆで蛙心理で避難しなかったのである。にも拘らず起訴され有罪とされたのは、やはり「被害者・加害者の二者関係」と「正しい基準」が前提され、正しく判断しえなかった者は断罪されるべしと

の論理式の外形的構成要件が満たされていたからであろう。しかし、どうにも気掛かりなのは、当の論理式を採用し展開するメカニズムが加罰に向けてほぼ自動的に起動し、勝手に稼働するように見えてならない点なのである。

たとえ地震予知が不可能だとしても、多数の死傷者が出れば、その点に人は疑問を抱き、何らかの統制・管理機能が働いていなかったかもしれない、それゆえに……と考え始める。この思考法が恐ろしいのは、事後的な救助や復興がいかに適切だったとしても、ありうべき完璧さから引き算する形で「能力の不足」が問われ、「不備」を追及される虞があるからである。追及の矛先が暗がりに向けられたなら、そこを照らすのに必要な、多かれ少なかれ政治的な思惑を含んだ戦術が必要と採用されるが、最も単純で残酷な手法は、何かしら「人災であった」と言える要素を探り出し、次いでその要素に関連する特定可能な人物を贓として引立てて祭壇に供する方法である。それが民意の鎮静化、つまりは為政者側——さらに言えば為政者ばかりではなく、その出来事によって自分の社会的な生存環境が脅かされそうな当事者すべて——の安寧に有効な方法として、ほぼ自動的に運用される。

他人に危害を加えてしまったのなら、過失か故意かを問わず責任を問われるのは止むを得ない。ところが、自動演算型の追及ツールは、幾つもの偶然が重なった不幸としか言えない、つまり「人為性」がほぼ皆無な事象であっても、誰かしら責任者を引つ捕らえては詰問し、咎め立て、必ず罰を与えようとする。被害者と加害者といった関係性がそもそも成立しない出来事であっても「業務上過失致死傷」という罪が用意されている以上、咎を受けるべき人物欄が埋まるまで犯人探しは続き、誰かが起訴されるまで終わらない。つまり、誰かが「想定外」と

口にすれば想定しなかったことの咎を論い、詰るような、端から見れば不条理であるだけのゲームが、多分に政治的な企図を含みながら「自然」に運用されてゆくのである。

結果として、より大きな不幸ないし不運に見舞われるのは、何が何でも不幸を誰かのせいになければ気が済まぬとばかりに憤っていた我々自身なのかもしれない。科学者の知見や現行の技術は、所詮未熟であり、せいぜいが過渡的な判断を下し、漠然とした予測を言える程度のものであったはずだ。にも拘らず結果の如何によって断罪し、処罰を迫ることになれば、科学技術の資産を握り潰すことになるばかりか、未来の科学者たちを萎縮させ、彼らに進路の変更を迫る愚挙にしかなるまい——我々の感情の爆発がどう反射し、どのような不幸を我々にもたらすかは容易に想像できるだろう。

仮説を立て、実証を繰り返しながら知見を修正し、精度を高めていくのが科学技術の一般的な方法であり、また唯一の方法と言っても過言ではない。真摯に研究に励む研究者なら地震予知が未熟な段階に留まっていることや、正確な予測が原理的に困難であることの根拠を熟知していたはずだ。しかし、つい先ほどドアをノックし、名刺を差し出した官吏や民間人にその真意がどれほど伝わったろうか？ 彼らは防災の立場から少しでも災害を減らすべく、「過渡的でも構わないから」と専門的な判断を求めた。研究者たちは互いの顔を見合せながらも、専門家の責任感からか、様々な前提を述べ、種々の条件を付しながらも可能な範囲で、より正答に近い予測を述べようとしたであろう。彼らは職業倫理からかエリート義務からか分らないが、とにかく「今、自分は社会的責任を果たすべく求められている」と信じていたから、身の丈の範囲で言えることを辛うじて発言したに過ぎない。だが、社会が専門家に求める身の丈は彼らの実際よりも遥かに大きく、常に巨人サイズなのだ。自分たち

に求められているのが神託の言葉であることを漠然と察知しながらも、ただ慎重に言葉を選ぶことしかできない研究者たちは、意に反して、しかし嫌な予感の中する形で、事後的に完璧であることを求められ、その観点から実際に完璧ではなかったことを咎められる。時間という要素さえ組み込めば実に倒錯的な論理が働いていたと分かるが、その種の倒錯が既に判例として記録されたことは銘記されてよい。今後、科学者に専門家として社会的責任を求めることは困難になるだろう。予知に失敗して刑事責任を問われるくらいなら、敢えて処罰の危険を侵してまで予測を発表しなければならぬ分野に進む者など、どこにいるだろう。危機を煽って別の商売を企む占い師を除けば、そんな危険を冒す善人はどこにもいない。科学や技術は、こうして必要性に反比例して秘密の殻に閉じこもり、研究は停滞し、志望者は激減することになる。

もしもイタリアの検察や地裁の判事が、被告について「正しい地震予知技術」を行使せず、刑事責任を問えるほどの過ちを犯したと考えていたのなら、自然科学に対する傲慢な過信と依存は判事の側にあり、彼らをして自然への敬意を欠いた愚劣な行ないに走らせたことになる。言うまでもないことだが、誰にも不幸が訪れない世界を築くことなど人間には出来ない。一瞬でもそう思える瞬間があれば、それこそ神を殺す思い上がりの時刻であろう——加えて言えば、あまりにも人間的な傲慢であり、しかも他人任せの傲慢でもある。しかし不幸は起こる。災難は一定の確率で訪れ、誰のせいにも出来ない。つまり誰にも責任を負えない苦難が、ちょうど自然災害と同じように発生するのは世の常であり、そのことを重々承知していたはずなのに、実際に不幸に見舞われてみると途端に、なぜか刑事責任を問いたくて堪らなくなってしまう……。そんな人たちが後を絶たない。だから今日も今日とて怒りに震える者たちが法廷の前で列をなしているのである。

人為への過信は誤謬であるだけでなく、論理の倒錯である。しかし、今やその倒錯的な論理が人間社会の将来を摘み取りかねない事態になっている。取り分け深刻なのは、素人の振り回す「業務上過失致死罪」のメスが医師の臨床判断に切り込んでくるケースである。

周知のように小児科や産婦人科を標榜する病院や医院が減っている。国立の医学部でも、産婦人科や小児科を志望する医学生が減少しているという。少子化の影響も考えられるが、訴訟リスクを抱えがちなことが敬遠の第一の理由だ。この傾向の起点ないし原因と思しき出来事は、当時、「産科医療崩壊」に結びつく出来事として大きく報道された。

二〇〇四年一二月、福島県のある県立病院で帝王切開手術を受けた産婦が亡くなった。翌々年二月、執刀医だった産婦人科医が逮捕され、同年三月に業務上過失致死および医師法違反の容疑で起訴された。裁判には二年半を要したが、福島地方裁判所は被告に無罪判決を言い渡した。検察も控訴を断念し、医師の無罪が確定した。起訴後休職していた医師は無罪判決を受けて患者死亡から実に三年八カ月後、病院に復職した。

裁判における鑑定人の医学的観点からの証言でも、この事例において被告医師の医療行為を医療過誤として過失を認定するのは難しく、正当な医療行為であったという意見が述べられた。医療過誤ではなく、また医療事故とも言い得ない不幸な出来事を警察・検察は「事件」として扱い、逮捕・起訴したのである。

そもそも件の分娩には前置胎盤というリスクがあり、出産には危険がともなうことが説明されていた。「前置胎盤」とは、子宮口の一部や全部を塞ぐ位置に胎盤が定着してしまう異常妊娠の一つで、高齢妊娠や多産婦に多く、経膈出産の場合には母子ともに生命の危険が伴うため、出産するには帝王切開以外に方法が無いとされてい

る。高齢での妊娠だからこそ子供が欲しいという妊婦の希望に添い、切開手術による出産が選択された。ところが開腹の結果、前置胎盤と合併して「癒着胎盤」が判明し、それが原因となって死に至った。

正常ならば胎盤は子宮から剝離され分娩されるのだが、胎盤の絨毛組織が子宮筋層に侵入して子宮から胎盤が剝離されないことがある。その場合は手術で胎盤を剝離させなければ出産の進行が不可能になる。癒着胎盤では、胎盤を子宮から剝離させる際に大出血を伴う危険性が高く、出血性ショックや播種性血管内凝固症候群により母体死亡の原因となる。癒着胎盤の発生率は低いのだが、母体死亡全体の原因に占める割合は約三%と高率となっている。

発症率で見ると、前置胎盤単独の発生率は約〇・五%である。一方の癒着胎盤が単独で発生する確率は約〇・〇一%とされ、いずれも頻度は低い。ところが前置胎盤がある場合、癒着胎盤は五%から一〇%の割合で併発する。その上、前置胎盤の場合は内診が禁忌とされ、癒着胎盤を分娩前に診断することは不可能である。そのため、前置胎盤が判明した時点から術前にかけて、担当医は合併症の可能性と危険度について患者と家族に何度も繰り返し説明していた。また、出産には手術が必要であり、そのリスクについて説明してただけでなく、死亡リスクを減らすためには子宮の摘出が有効であるとも忠告していた。しかしながら産婦と夫は子宮を残すことを強く望み、自己責任による判断として、希望に合った手術が実行されることとなった。

繰り返すが、癒着胎盤は術前における予測がほぼ不可能な合併症である。たとえ術前判断が誤っていたとしても、刑事責任を問うというのは些か酷に過ぎる。しかも担当医は術前に繰り返しリスクに関する説明を行なっており、十分な理解を得た上で、敢えて患者の希望に副った高リスクの手術に踏み切った——この時点で、もしも

医師に咎らしきものとするとすれば、「子宮を取るか命を取るかの事態に立ち至ったとき、あなた方はどちらが希望なのか」との判断を迫り、産婦と夫の答えを得ていなかった点に求められるだろう。しかし、それとて事後的に「……べきであった」と省察することであって、責任問題とは脈絡が異なる。大事な点は、最終的に無罪になったものの、慎重に手順を踏んだ上でなされた医療行為について刑事責任が問われ、医師が逮捕されてしまったことにある。臨床判断や治療方針の決定、あるいは手術方法の選択に対して警察・検察が踏み込んだという事実それ自体が由々しき「事件」と見做され、多くの医療関係者、殊に産科医たちに多大な衝撃を与えることとなった。しかも産婦の遺族は、判決以前から何度もマスコミに露出し、死亡したのは完全な医療ミスであり病院や医師には重大な責任があると、執刀医を侮辱する調子で繰り返し語り、ある時には医師に対して死亡した妻の墓前で土下座するよう要求した。無論、検察と遺族だけでなく、マスコミの責任も大きい——殊に或る在京キー局は、殆ど無責任な思い込みによりその後の言論や捜査を誘導し、延いては歪な医療崩壊を導いた点においても、その責任は極めて大きいと言わなければならない。警察・検察による医療への強引な介入や遺族感情の発露を盲目的に垂れ流すような報道は、患者の希望を叶えようとするほど医療行為にともなうリスクも高まるような困難な状況に直面した際、医療関係者にリスク回避を選択させるか、少なくとも「安全」な選択肢に誘導することになるのは間違いないところであろう。

昔から分娩で死亡する可能性は高く、常に一定の割合で死者が出るものであった。ヒトは成長が遅く、一〇か月以上の妊娠を経ても未熟児の状態で生まれてくる。妊娠期間は胎児の成長の度合いだけで決まるのではなく、胎児の成長と母体の許容限度との兼ね合いによって決まる。母体は母子の生命とともに維持し得なくなる間際ま

で胎児を子宮に宿しているが、限界に至ると致し方なく未熟児の状態で子を産み落とす。近代医療の急激な進歩が飛躍的に母体の死亡率を低下させたが、出産が今なお生命の危険と隣り合わせであることにはそれゆえ変わりがない。むしろ昨今は高齢出産（特に高齢の初産）の増加から、よりリスクは高まっていると言えよう。にも拘らず、自然法則に従わざるを得ない事象についても、「死のあるところには必ず咎もあり」とばかりに国家装置の駆動ユニットである警察や検察といった統制機構が反射的にすつくと立ち上がり、せっせと介入してくる。

自動統制ツールは「事故」が発生した要因は「基準」に沿った行動を採用しなかったからだと決めつける。不幸を招いた「加害者」は不正義をなしたがゆえの帰結に責任を負わねばならず、従って刑事罰を与えるべし——これが彼らの行動原理である。お粗末な論理だが、それが次々に出来事に覆い被さり、「業務上過失致死傷罪」のお膳立てに従って展開されてゆく。「罰」による統制への傾斜は、こうして知らず知らずのうちに社会全体に波及する一方、ヒトも動物である限り、処罰を回避すべく低リスクの選択をするようになってゆく。執刀医に土下座を求めた遺族もそうだが、昨今は様々な「事故」において「遺族感情への配慮」の名の下に遺族の野放図な感情放出が許され（煽られ）ている。「被害・加害」の対関係と「基準の真正さ」という二項コードが警察や報道ばかりか、遺族にも疑いなく前提され、三者の間で共有されているからこそ、加害者への裁きが正義に適うと盲目的に想定され、「罰」による統制の広がりをも許すことになってしまった。問題なのは、その傾向が本来の目的であるはずの「より良い社会」の達成を促進するどころか、逆機能的に阻害する方向に暴走を始めた点にある。

事例に挙げた地震学者や産科医などの専門家に限らず、多くの人々が形はどうあれ各人なりに社会への貢献を

目指して事態の改善や問題の解決に向き合っているはずだ。しかし、未熟な段階にある科学的な知見や技術ではどうにも解決しようがない事態もある。もちろん、いつ成熟するのか、はたまた人の頭脳や技術で以て真の成熟段階に達することが出来るのかさえ実は分からない。しかし、事態が緊急であればあるほど、リスクの計算を回避するわけにもいかず、どれほど未熟であっても、現状の人材と知見をフルに動員して立ち向かわなければならぬこともある。元々リスクが知覚されているだけに、事態解決には行為者の専門的な技能が必要だが、それと同時に道義的な意欲をも必要とする——所謂「責任感」というやつだ。だが、失敗したら間違いなく刑事責任を問われるとしたら、どうだろう。事態の解決に向けられた善意と努力の芽は、験の奥にちらつく刑事罰の可能性により、事前にすっかり摘み取られていることだろう。^⑦

「正しい基準」なる抽象に基づいて統制機構が正義の実現に邁進すれば、それにより少なくとも二つの問題が生じるに違いない。第一の問題は、右に述べたような科学の未来を潰し、技術の現場を萎縮させるという問題である。第二の問題は、自分の安全をも他人任せにする「他者依存」の蔓延である。他者に依存する者たちは、必ずしもそのために腰が低くなったり、社交的になつたりするわけではない。それどころか逆に原因不明の自惚れに思ひ上がる「モンスター」の挙動に及ぶ——これまた浅薄で飾り気のない落ち度ゆえにネットで蚊に刺されて死ぬこともあるのだが……。ともあれ、これら二つの帰結こそ統制機構の建前に反して、社会の安寧や秩序の達成を妨げる格好になっているのである。

次に「他人任せの安全」という風景を覗いてみよう。

二〇一一年の四月から五月にかけて、北陸を中心に展開する焼き肉チェーン店で腸管出血性大腸菌O111およびO157を病因物質とする食中毒が発生し、五人が死亡する事態となった。牛肉の刺身に生卵を乗せたユッケという名の食物が原因であった。これまで肉の生食について厚労省の衛生基準はあったものの強制力はなく、生食の客への提供は飲食店独自の判断で行われてきた。また、どの時点で病因物質が付着したか定かでなく、警察が業務上過失致死を視野に入れ強制捜査を行なったが起訴には至らなかったという。この事態を受けて厚労省は食品衛生法に基づき、牛肉の生食販売に対する罰則付きの基準を新たに作成し、個々の普通飲食店で加工した生肉は店に出せなくなった。管理・統制方法としての「正しい基準」の再構築である。

少し前までは、誰もが生肉を食べることは危険だと思っていた。狂牛病や鳥インフルエンザやらで輸入食肉の危険性が定期的にマスコミを騒がしていたことから、今でも肉の生食には相応の警戒心が働いているものと思っていた。にも拘らず、あそこまで被害が大きくなった理由が気になり、授業内で大学生に聞き取りを試みた。

「みんなは焼肉って好きだろう。焼肉屋へは行くの？」

「高いところは無理だけど、安いチェーン店なら割とよく行きますよ」と女子学生。

「生のヤツなんかは食べるの？」

「焼肉にユッケは定番すよ。何人かで行くんだけど仲間の誰か一人は必ずユッケやレバ刺し、注文しますよ」と男子学生。女子学生も全員が頷いている。

「でも、生肉って大丈夫？」

「大丈夫でしょう。だって店で出してるんだから」

彼らの応えに少しばかり驚いた。ほぼ全員が生肉を食べるというのだ。しかも、店で供されているから肉の生食は安全だと何の疑いもなく言つてのける。自己防衛の感覚が鈍磨しているのかもしれない。

件の食中毒における直接の責任はどこにあった（もしくは、どこにあると決着した）のか？ 食肉を卸した会社なのか、あるいは客に生肉を出した焼き肉チェーン店なのか？ 結局、いずれも刑事責任を問われることはなかったが、両社ともに社会的な制裁を受け、間もなく倒産に至った。いつものようにマスコミは大騒ぎしながら犯人探しに明け暮れ、直接的な責任は無くとも、曖昧な基準しか準備してこなかった厚労省にも少なからず責任があると言い出す。無論、何の警戒心もなく生肉に齧りついた肉食獣の自己責任は、残念ながら「被害者」の座に頓挫してしまつたがゆえ今後も問われることはないだろう。

罰による統制しか方法論のない行政は、「被害者・加害者」の弁別に基づいて「加害者」にのみ責任が有るという立場に立つ。彼らは例の如く法令に手を加え、基準を精緻にした上でせつせと立入り検査を行い、基準を厳格に遵守させることにした。いつもながらの適度に厳肅、また適度に牧歌的な儀式を恭しく、また長閑に挙行したことを以て行政は安全な環境を作つたと宣言する。また「被害者」側に分別される飲食客は、行政の独り合点を鵜呑みにし、晴れて「安全」が確保されたと「安心」して生肉から滴る体液に唇を濡らす。

幼児相手の子育てにすら「罰」は役に立たないと言われて久しい。しかし刑罰であれ行政指導であれ、国家による統制システムは、為政者をして囚人以上に罰に囚われた官僚を育成させてしまつた。なるほど、処罰は弛緩した態度から生まれる過誤を僅かに減らす程度の効果は上げるかもしれない。たぶん事故の発生確率も僅かに下がるだろう。しかし処罰に怯える精神から建設的な何かが生み出される可能性は乏しい——ルイセンコ主義の猛

威が旧ソ連の生物学界を陥れた惨状を見ても、豊かな稔りを望めないのは明らかだ。

加えて、どれほど厳しい処罰をちらつかせても、主犯ないし黒幕には通用しないのが世の常である。事実、肝心の腸管出血性大腸菌には厚労省が発する業務停止命令などまるで効き目がない。それゆえ従業員への受罰恐怖は、何をどうしようと一定の確率で起きてしまう食中毒の菌止めになりはしない。病原体の病原性を「処罰」による統制では制御出来ない以上、想定内の被害者（つまり客だ）を安易に安心させてはいけない。にも拘らず我々は、実在する病原体の病原性よりも店舗や厚労省が発する言葉の効力を信じ、疑うべくもない確率論的な危険性よりも実に疑わしい「安心」という語の方を鵜呑みにするのである。

人間の安寧への希求は、科学技術に対する万能性への過剰な期待となり、やがてそれを司る統制機構が発する「安心」情報に対する妄信へと転化する。こうした素朴な心情の上に、世の中に波風が立ってはならず、安寧秩序が乱ればそこに罰せられるべき加害者がいるに決まっているとの思い込みが重ね合わされて「業務上過失致死傷」という罪科が今も成立しているというわけだ。統制機構の「独り合点」なる滑稽な機械が徐にぶるぶる震え出し、自動的に稼働すると、忽ち羽虫の群れがぶんぶん騒ぎだし、被害者以外の誰かが絶対に悪いと反射的に考え、そこかしこに飛び立ってゆく。この愚かしい装置への全幅の信頼が代理罰の執行者への過度の依存に繋がっているのは言うまでもない。やがて他者依存の態度は常態化し、「みんなが言っているから安心だろう」といった思考停止と判断放棄から成る莫迦の合わせ技につながってゆく。

いつの頃からか、人々は次年度予算を弾き出すことが未来の社会を設計することだと錯覚し、書類があることを真実であることと取り違えるようになった。予算の観点から推定する以上、不確実性は排除され、将来は設計

思想から些かも逸脱せず、それゆえ不変であると信じられてきた。不慮の重大事故を想像して打ち震えるのではなく、一年後の安心を確信して今から安堵の吐息を洩らすのだ。爾来、ヒトは自然論理の分節力を借りて、万物をせつせと切り分け、整序し、所定の戸棚に仕舞い込んだ。しかし、棚の間の隙間には名づけようのない「物」が蠢き、流動的で粘り気のある何か垂れ下がり、不吉な兆しが騒めいていたはずだ。それらは言語であるよりは物質であり、言語の秩序に変更を促す「物」の側からの要求である。「物」とは、いわば言語の空欄に覗く顔だ。恐らく、人間社会の活性の源（レヴィ・ストロース）はそこにあつて、名前のない顔が人に本源的な思考を働かせるよう強いてきた。次年度予算を未来と取り違える倒錯は、それゆえ自然論理の対極を指向するばかりか、事物を分類する人間の傾向の悪しき徴候のみを拡大投射し、戯画化した帰結になっている。その結果が、安寧秩序の達成を目指しながら逆にそれを阻害するという本末転倒になっているのである。

三 能動的無条件降伏宣言——能力検定と格付けについて

今日も今日とて電車に揺られ仕事場に向かう。車両を埋め尽くした乗客は大半がケイタイやスマホに祈りを捧げ、冗漫な時間の消費に勤しんでいる。車内はさながら「瑣末」を伝達する媒質で充たされているかのようだ。古典物理は光の媒質として要請されたエーテルの概念から抜け出るのに難渋したが、人々は黙せる彼らの間に生じる無意味の空隙を充たすべく、必死に瑣末な意味を充当している。

日本の公共空間の設計思想は「公平」を旨としている。情報リテラシーの低い人やネット空間への移動を拒否

した人のため、スマホほど便利ではないものの、車内には無意味な時間の苦痛を緩和すべく、僅かながら現実からの離脱を許す装置が設えられている。もちろん無料だ——というのも宣伝広告なのだから。広告は、我々が無意味の苦しさから思わずそこに目を遣り、眺め、反芻するのを今か今かと待ち構えている。

電車内の広告掲載場所は、ランマと中吊りとドア脇の三種類がある。天井と壁が交差する辺りの曲面壁——和室でいえば欄間にあたる位置——にランマ広告が並べられている。中吊りはご存知のように車両の長手方向に直交して天井からヒラヒラと吊り下げられた広告である。ランマと中吊りは、満員電車であつても広告が見えるように高い位置にあり、広告を見れば必然的に他者と視線が交差しない——即ち他者を遮断できるよう設けられている。身体的に拘束された乗客に対し、他者接触の苦痛を軽減しながらメッセージを捻じ込む、実に良くできた商空間装置なのである。

そんなことを思いつつ、ふと視線をランマ広告からドア脇に移すと、図書館で勉学に勤しむ女子大生らしき写真に被せた次のような文章が目に入ってきた。

〈学力は伸び悩んでる〉

〈ムダ毛は伸びてる〉

〈学割脱毛。学生三年間で最大二部位脱毛し放題〉

〈学生定番人気プラン〉

何となく眺めている時は気にならないが、よくよく反芻してみると「学生三年間で脱毛し放題」って、それほどまで剛毛に苦しむお嬢さんが増えたのだろうか？ あるいは体毛が頭髮ばりに成長を続ける奇病に悩む娘さん

がいるとでもいうのか。「学生定番」と謳うくらいだから、頻繁に通い詰め、繰り返し脱毛しなければ命に関わるような重篤な剛毛も少なくないのかもしれない。しかも広告を信ずるなら、学力と体毛の成長には何かしら負の相関関係があるらしい（これは良いことを教えてもらった……）。

しかし、それにしても、である。勉学に励む乙女の肖像に付くキャプションとしては、何とも不可解な文言ではないか。美容といえば聞こえは良いが、所詮は毛抜きである。その瑣事をさも誰もが関心を寄せるべき重大事であるかのごとく吹聴して収益を上げようと企む商魂の逞しさと、身も蓋もない表現に恥じらう様子もないこと、さらには、こんな瑣末なことが相応に高額な広告掲載料を払っても採算が合うらしい、そのことが少なからず驚きであった。

或る商品の市場規模と競争状況は広告媒体の種別と掲出頻度にある程度、相関している。その観点から改めて車内を見渡すと、金融・証券、不動産、老人ホーム、分譲マンション、アルコール類や清涼飲料、葬祭・墓地、旅行、婚礼等々の広告が並んでいる。いずれも高額な広告掲載料を支払える程の市場規模があり、その一方で高額広告掲載料を支払ってでも多くの購買者を獲得しなければならないほどに競争が激化している、そんな業種の商品群が並んでいる。その中でも中吊りは雑誌がほぼ独占し、ランマとドア脇はエステと英会話と消費者金融が季節に関わりなく一年を通しての常掲広告となっている。その他では中元や歳暮の贈答品、暑中のビール・清涼飲料、大学や専門学校の入試やオープンキャンパスといったシーズン掲載の広告が目立つ。車内広告でも一つ目につくのが、ありとあらゆる種類の生涯教育や資格取得や検定試験などの広告である。

最近の車両にはデジタルサイネージのディスプレイが乗降ドアの直上に設置されており、テレビと同じCM動

画を流している——素材は同様だが放映時刻と頻度は電車の時間帯ごとの客層に合わせて調整されている。どの時間帯でも流されるのは家電製品だが、通勤時間帯によく見かけるのが、オフィス・ソフトの操作に関するマイクロソフトのMOS検定である。パワポ部長やエクセル男子が登場し、技能検定の取得が就職や職位獲得に有効であることを訴求する。もちろん、このご時世である。机上にパソコンが皆無のオフィスなど想像し難い以上、オフィス・スーツとも呼ばれるソフトの扱い方に慣れていることが就労者ないし社会のエチケットのよう求められる（と感じられる）。広告を見上げる誰もが能力向上の意義や教育の必要性を痛感する（自分の能力を低いと感じている者ほど痛切に感じる）次第である。そうしたターゲットたちの「潜在承認」の畑の上に商品イメージの種が蒔かれ、販売促進の側面的環境が構築され整備されるというわけだ。場所が場所だけに比喩的に暗示するなどという品のよい手段は要らない。露骨な必要性を強調する広告戦略では、鎧の下刃が丸見えになっていて構わないのであり、その方が却って広告効果は高い。表計算ソフトを素早く扱うと職場のマドンナの瞳がハートの形になるという演出の恥じらいのなさに驚愕したことがあったが、繰り返し見ているうちに「複雑なソフトを巧みに扱える」↓「仕事ができる」↓「職場で見直される」↓「人の見る目が変わる」↓「女の子にモテる」といった、いかにも社会人の欲望をくすぐる因果連鎖が簡潔に表現されていることに気づかされた次第である。MOS検定の狙いは商品販売の環境整備・側面補強にあるのだが、昨今は、検定講習や試験自体がビジネスになるらしい。職業に関わる能力検定のみならず、あらゆる種類の能力向上講習や検定試験が相当に盛んな様子である。

検定試験とは資格を与えるに足る能力を保有しているか否かを査定するものである。医師や弁護士のように高

度な責任をとらない、「業の独占」を法的に保証するに足る能力を判定する国家資格試験から、業界内の職業的なモラルと能力の向上を目指した（業界団体によって掌握された）検定試験を経て、あるいは市区町村の振興を目指した、検定する側も受験者もともに遊び気分でも臨む昔ながらのご当地検定に至るまで、極めて多種多様な検定試験が行なわれている。特に瑣末とも思える検定試験がインターネットの普及と相俟って乱れ咲きの様子を呈しているのだ、思いつくままに挙げてみよう。

（財）日本消費者協会の「消費生活能力検定」は、数千円の検定料を支払い同一問題の正答率によって、消費生活の能力が一〜五級に評価される。だが消費生活能力が高いと評価されて何か良いことがあるのだろうか。あるいは低いと評価された場合には深く反省すべき落ち度や改善せねばならぬ短所でもあるのだろうか。全くの謎だ。似たようなので「社会常識能力検定」というのもあり、社会性に欠けていると自認し、また周りから疑われてもいる筆者たちは少しばかり胸を締めつけられる。完全なお遊びなのだろうか「議員力検定」というものもある。この戯れが何かの間違いで国家資格に昇格でもしたら、官僚と議員との権力関係に変動が生じるだろうし、選挙という制度自体が消滅しかねない——何しろ国民の代表に相応しい能力が選挙ではなく、試験で決まってしまうのだから。そのほか「観光特産士検定」や「夜景鑑賞士検定」（産経新聞主催）というようなものもある。「サンタクロース検定」という微笑ましいものもあれば、他人の死がより良いものになるよう相談に乗ろうという、そんな奇特な人の能力向上に関わる「終活カウンセラー検定」というものもある。若者向けには「ストリートダンス検定」がある。反社会的な雰囲気があるからこそそのストリート系に、競技会ならぬ能力検定とはいいかにもミスマッチで却って可笑しい。

囲碁・将棋や武道の段位など、能力の検定と格付けは昔から存在し、それが学習・鍛練の励みになり、向上心の健全な方向づけに効果を上げてきた。このように高みを目指した修練を想定して到達目標が設定され、それに沿ったメソッドがあるのなら良いのだが、どんなに励んでもどうにもならないような検定も溢れている。トリビアルでブアーな知識や技能を低レベルで獲得しても、どうなるものでもない。何となく面白そうというだけの瑣末な暇潰しにだらしなく身を預けるといった、その姿勢が慨嘆の対象であるうちは、それでもまだよしとしよう。問題なのは瑣末なことに身をやつす腑抜けた姿勢が、社会の収奪装置に好適な稼働環境を提供している点である。いわば人格の隙間がカネ儲けの草刈り場となり、間抜けの抜け穴を埋めるべく文化的な価値が巧みに捏造され、ぎゅうぎゅうに詰め込まれる恰好になっているのである。

少し前のことだが、漢字検定協会が四〇億円という巨額の収益をあげていることが報道された。しかも公益団体である財団法人であるにも関わらず、漢字検定協会では、理事長の縁故に当たる複数の人物に収益が環流するシステムが築かれていた。そのため監督官庁の文部科学省が検査に踏み込み、理事長が辞任することとなった。その後、理事長父子は背任罪で逮捕・起訴され、懲役二年六か月の実刑判決があった。ポロ儲けの上に旨い汁を吸っていたのだ。かつてKSD（現中小企業災害補償共済福祉財団…通称あんしん財団）でも同様に、理事長によって収益環流の私的システムが築かれ、政界を巻き込んだ贈収賄事件に発展したことがある。一定以上の広がりを持ち、カネの出入りを伴う社会事業が一団体に独占的に任されると、たとえ単価が低くとも独占ゆえに数量が巨大になり、そこに巨額の自動収益機構が生まれる。その収益機構が社会制度の一部として構造的に定着し、組織として洗練されると、組織構成員が所謂「旨い汁」を吸えるメカニズムがサブシステムとして生み落とされ

る——社会の病巣形成過程を知るには欠かせないパターンである。

とはいえ、我々が関心を寄せているのは、その点、つまり「旨い汁」の生産システムではない。また、その触法的な行為を嘆きたいわけでもない。心から驚き、由々しき問題と感じるのは、たかが漢字テストを実施するだけでカネが儲かるということである。

漢字検定協会の検定料は準二級までなら一〇〇〇円から一八〇〇円とそれほど高額ではない。だが注視すべきは単価ではなく受験者数だ。つまり、ボロ儲け機構の円滑な稼働には、金を払ってまで他者に検定されたいと願う多数の人々が欠かせない。受験者の皆さんは、そんなにも漢字を愛しく想っていたのだろうか。小学校時代ならまだしも、中学生ともなれば漢字の書き取りに欲情する者など少数派のお勉強好きに限られていた。それが大人になったらなつたで他人に金を払ってまで漢字の書き取りに励み、持てる能力を褒めてもらおうというのだ。たぶん「前向きに努力してみた自分」を他者から「承認」されたいという単純かつ明快な動機こそ、この種の巨大産業の歯車を回す原動力なのだろう。

無論、生きる上で、やり甲斐や達成感など内面的な報酬もまた不可欠である——各人が何にそれを見出すかは別にしても。さらに、自分が真剣に取り組んだ分野で他者より優れているということを格付けの形で証明してもらえれば、実利ばかりでなく自尊という報酬をも手にし得る。だから人は、自身にもたらされる内的報酬の見込みに応じて、「学び」機構に対価を払う——小学生が宿題ノートに「花まる」を貰うために担任の机に走ったのと同じように。現在、お稽古や習い事の市場規模は約一兆六千億円、資格取得学校・講座・通信教育は約一兆一千億円⁽⁸⁾と言われ、いずれも相応の産業規模となっている。大人になつても「まる」が欲しい人々が絶えな

いがゆえに、学習の機会を与えただけで産業と呼べる規模にまで成長し得たのである。

産業である以上、効率的な収益獲得の方法を追求するのは道理に適っているし、より儲かるシステムが生み出されるのは必定だ。例えば、リクルートの学習メニュー誌「ケイコとマナブ」では、お馴染みの英会話、占いやマジックといった趣味娯楽、実用学習から難関国家資格の公認会計士受験講座まで、数百の講座が用意されている。一方、生涯学習を謳うユーキャンは、行政・法律・財務・会計、福祉・医療・衛生といった分野で就職に必須の資格受験講座から、就職に有利と思しきパソコン関連の能力検定講座、加えてペン習字・書道、囲碁・将棋、音楽といった趣味講座まで、これも多種多様の講座を用意している。ちなみに、ユーキャンは日本書道協会や日本囲碁連盟も事業体の一部として傘下に行っているが、それらでも年間四三〇億円の売り上げを達成している。

従って、「学び」産業の基本的なビジネスモデルは、ありとあらゆる講座を幅広く開設し、受講の間口を広げ、敷居を低くすることで「商品」の軽量化と薄利多売を図ることだと言えるだろう。小中学校、高校から大学、あるいは塾などの所謂「学校」に比較すれば、通信講座は圧倒的に施設や人的なコストが低い。だから受講料も安い。もちろん対面講習に比べれば自ずと教習効果には限界があろう。逆に言えば、それだけ受講者は気楽に臨めるし業者側の責任も軽い。生涯学習を謳いながらも、学問や技術・技芸を極めたいわけではない——誰もがそんな暑苦しくて面倒なことは望んでいないし、受講者と業者側の双方にとってお気軽・お手軽なことが重要なのである。学び産業が花咲くのは、そういう心の生温い隙間というか経済構造の小さな路地の一角なのである。

さて、趣味的な技芸などのお手軽分野から、もう少し職業的な責任に関わる資格・格付けの話に移ろう。「業の独占」が法的に許される一方、多大な「責任」を伴う国家資格の場合はどうか。医師や弁護士が代表格だが、

資格検定に格付けが伴うという点では、やはり建築業界の話をせざるを得ない。どこの国でも建築設計には一定の能力を求め、その能力がある証として資格を与える。ずいぶん前の話だが、米国の友人に日本では建築士に等級があることを話したことがある。友人曰く、

「アメリカでも登録建築士という制度があるよ。素人に建物を造らしたら危ないもん」

「でも日本じゃ身分制みたいな等級があるんだぜ」と私。

「ヘエーッ、一番上はなんて言うの？」

「一級建築士」を何と訳せば良いのか俄かに迷ったのだが、言葉が先に出てしまった。

「ファーストクラス・アーキテクト」

「オォーッ、その先は言わなくても分かる」と友人。

「その次はエコノミークラスだろう」

人呼んで「お手頃価格建築士」——何と舌触りの良い呼称だろう。あたかもリーズナブルな価格の住宅をバタバタと建てて、涼しい顔をしている庶民の味方のようなのだ。

ご存知のように日本では、建築士の資格が一級建築士、二級建築士、木造建築士の三等級に区分されている。一級建築士はどのような規模・構造の建築物であっても、その設計監理業務を行なうことが出来る。二級建築士はそれより小規模なものしか設計・監理が出来ない。木造建築士は専ら木造の住宅を対象業務とする資格である。当初は一級・二級の二種類しかなく、二級は過去問をざっと読んでおけば受かるような試験であった。多くの大工がかつては二級資格を持っており、建築主と話し合いながら工事のみならず確認申請もこなすのが珍しくな

かった。だがその後の建築の複雑化と高度化によって能力査定ハードルを上げる必要が出てきて、工事に忙しい大工が片手間に学習して受かるような資格ではなくなった。そこで救済策として木造建築士が新設されたのである。本来、計画や設計の仕事と建設作業は質の異なる業務である。建築の分業化が進行した現在、いくら規模な住宅が対象とはいえ、設計と施工を同一資格の下に統合しておくのは無理がある。そのためか、今では木造建築士の受験者は、一級建築士の四万人前後に比べ、全国で毎年七〇〇人程度というところまで落ち込んでしまった。

弁護士には一級・二級の等級区別はないし、金融弁護士や暴力事犯弁護士といった専門区分もない。同様に医療の世界でも、一級医師や二級医師といった等級分けはない。薬品に二等品と言って差し支えないカテゴリーが出来たのだから、医師にも安い医療で請け合うところがあってもよさそうなのだが……しかし、よくよく考えてみると二級医師に診察を頼むのは気が引けるというか腰も引けるというのが人情ではある。とはいえ、そのような露骨な等級ではないにせよ、専門医や専門看護師制度といった「品質保証」紛いの格付け制度が広がりつつあるのも否めない。我が国の場合、社会制度の設計はとかく精緻で紛らわしい細分化に向かう傾向があり、必然的に等級・区分が煩雑な階層を構成し、それぞれの階層に属する権限や責任もまた相応に煩雑化の道を辿る。嗚呼。

建築の世界では、計画・設計と施工に必要な能力は別ものということで、かなり以前に施工に関わる一・二級の施工管理士制度という国家資格が創設された。さらに耐震偽装事件以降、建築士資格を細分化して構造と設備のそれぞれに専門の一級建築士制度が創設された。

罰則を強化し、併せて専門性を高めた資格を作り出しさえすれば、偽装事件を防止できるとでも（どこの誰かが）考えたのだろうか。実際にはどれほど制度を精緻化し罰則を強化したとしても、不心得者は一定の割合で輩出されるものだ。それはどんな体制・制度でも同様であり、自然発生的に出現する悪意まで風潰しに矯正したり、発生自体を防止することは出来ない。にも拘らず国交省の官僚たちは、単純かつ原理的な真実を意図的に無視したのか、あるいは何か手を打たなければサボタージュを疑われると焦ったのか、はたまたよい機会だから社会の仕組みを自分の手で改造しようと思いつたのか、ともかくカネ儲けに目の眩んだデイベロッパーと不心得構造設計者との合作ないし連作の犯罪行為の本質は全く別のところにあると知っていながら、問題を自分たちに採用可能な統制手法の問題へとすり替えてしまった。その結果、煩雑で硬直した建築確認制度と極度に専門分化した建築士制度が産み落とされてしまったのである。

法改正後、建築士には定期的な講習が義務付けられた。講習の冒頭に国交省の役人が挨拶に立ち、「業の独占を法で保障された皆さんはそれなりの責任があることを自覚して欲しい」と必ず説教を垂れる。講習を含め、新たな建築士制度を遵守するよう求めながら、同時に講習の発明者である役人の手柄やその統制方法まで正当なものとして、平伏して認めろと言っているのである。受講者は高額な受講料を支払い、関係（天下り）財団法人の発行による分厚い教本に従って、ほぼ丸一日の受難（受講のミスタッチではない）を甘受せねばならない。講習終了後には試験があり、合格しなければ再受講が必要になる。もし再受講を拒否すれば、建築士の仕事を続けられなくなる。

確かに建築の安全のためには一定の能力が必要なのは当然である。それゆえ講習を義務付け、試験まで実施す

るのだろう。だが、その試験の正解はすべて教本に書いてあり、試験中その教本は参照してよい。しかも講師が「この箇所は考査に出る」と教えながら講習が行われるのである。こんな考査では無論のこと求められる能力の判定など出来っこない。ただ設問数が多く、正解に付箋をつけても良いのだが、分厚い教本のどこに何が書いてあったか反射的に想起し得る記憶力が求められ、併せて重い教本を短時間で繰り返し捲る体力が必要となる。広いホールに数千の人間が一堂に集められ、「業の独占に対応する重い責任」を求められながら、超短期記憶と手根屈筋の持続力を鍛えられる姿は涙ぐましくも甚だしく喜劇的である。

しかし、その喜劇は笑えないのだ。なぜなら、制度改革は「業を独占する者」の責任強化の方向でしか実施されることのないからである。そもそも責任の強化が改革の眼目である筈の問題解決に資するの否かの議論すら定まっていないのに、先走って虚しい講習が実施され、儀礼的な考査ばかりが繰り返された。狙いは那邊にあるのか？ どれほど中身が空疎であれ、責任論を執拗に唱え、また経文のように唱えられているのを耳にするうちに、社会的な問題は厳格かつ緻密な資格制度によって解決されるという信仰が生まれ、そう思ったのだろう。そして篤き信仰の下、官僚たちの統制手法もまた数千の信徒により追認されてゆく、と。

人が自身や能力の保証にすぎるのは、証書の文言が「○○の名において」の力によって支えられていると信じるからである。その支えの源泉が国家であれ、○○協会であれ、「名において」保証するものは押し並べて「権威」と呼ばれる。そして、権威もまた社会活動の成果であり、人と社会の再生産に関わる社会機構の一部である。時にそれは他者を統制する仕組みとして大きな顔をし、時にカネ儲けの道具として下手に出て、甘言による籠絡を企むのである。

もとよりカネ儲けは冷徹なものである。販売数を上げ、収益を増加させる目的に有効か否かが基準となり、その下で様々な——本来的に重要なことが瑣末なものとして扱われ、瑣末なことがさも重要であるかのようになれるといった——倒錯的な現象が生じる。事業者の欲望は商交換の成功に寄与するか否かの一点に懸かっており、物事の本質までがその一点を巡って野放図に操作されてしまうのである。権威を権力の源泉とする官僚にとっても状況は同様である。彼らは、おのれが望む形で統制が機能するよう、承認発行という「人參」を栽培しながら、規制の精緻化に精を出す。この過程でも、やはり物事の本質が操作され、倒錯的な歪曲が避けられなくなる。

瑣末なことにだらしなく身を預けながらも、その一方で小さな自尊心のために「上なる何者」かに格付けされるのを望む我々は、あたかもメーメー鳴きながら自ら柵に入っていく小賢い従順な羊の群れのようだ。我々は愚かにも統制とカネ儲けで出来た柵の中に安穩な住処を見出す。そこで我々は、毛抜きが美しさの重大要件であるとか、些細なことでも能力向上の努力は意義があるとか、あるいはグローバル・スタンダードに準拠することは良いことだとか教導・訓練され、「畜群」（ニーチュ）として飼育されてしまうのだ。

しかし、人はどうして牧童の指図に従い、権威のお墨付きを欲しがするのか？それが権威だからなのか、あるいは権威であろうがなかろうがとにかく従うという忌まわしき習性があるからなのだろうか。権威が羊の群れを生み出すのか、羊の群れがそれを率いる羊飼いを副次的に分泌するに過ぎないのか？フーコーは西欧の修道院において成立した牧人型権力の特徴として「全面的依存」を挙げる。「全面的依存」ということは三つのことを意味します。第一に、それは服従関係ではありますが、その服従は法への服従でも、秩序原則への服従でも、道理

になつた嚴命への服従でさえもなく、理性によつて引き出される何らの原則・結論への服従でもないということです。これは、ある個人の他の個人に対する服従関係なのです。つまり、この嚴密に個人的な関係（導く個人を導かれる個人に相関づけること）は、キリスト教的服従の一条件であるのみならず、その原理自体なのです。導かれる側の者は、この個人的な関係の内部において受け容れ服従しなければならないわけですが、その理由はいふと、これが個人的な関係だからということなのです。…（中略）…つまり、キリスト教徒にとっては、服従するとはこれこれの法に従うということでもしかじかの原則に従うということでも、何らかの合理的な要素に即して従うということでもなく、何者かへの依存状態に全面的に身を置くということであるという原則です。しかも、それが何者かであるということが、そのように何者かに依存する理由なのです⁽⁹⁾。

我々は「全面的依存」の原理が単に修道院にとどまるものではないし、西欧社会にとどまるものでさえもなく、我々の社会の原理であると考えなければならない。すなわち、我々は一方の命令に他方が服従するという形で人々を関係付けることを原理として構築された社会に暮らしているのである。保証やお墨付きはそれが正しいから我々が欲するのではないし、新たな資格検定を受験するのは制度の改正に賛同したからではない。そうではなく、我々は先ず第一に服従するのであり、真正性や合理性、正当性といった表看板のすべては羊の羊たる服従の証の上に積み重ねられるのである。

我々の振る舞いの滑稽さを結晶化させたかのような例をフーコーが挙げているので、続いてそれを読んでみることにしよう。

「カッシアヌスが『共住修道制』で報告したもののなかに、また『ラウソス宛の修道士史』のなかに多くの物語があります。たとえば、思考停止の試練とは次のようなものです。ある命令が修練士に下されると、なぜその命令が下されたのか、やりかけの仕事を続けたほうがいいのではないかなどと訊ねずに、そのやりかけの仕事をただちに中断しなければならぬ。カッシアヌスはこの服従の美德の例として、ある修練士の話を挙げています。その修練士はあるテキストを（それも聖書のテキストを）筆写していたけれども、自分の下されたあたうるかぎり莫迦げた命令に従うために筆写を中断した。彼は筆写を段落の最後で中断したのも、文章の最後で中断したのでもなく、単語の途中で中断したのでさえなく、ある文字の途中で、その文字を終わらせずに中断したというのです。これはまた莫迦げたことの試練でもあります。服従の完徳とは、命令が理にかなっているから従うとか託された務めが重要だから従うとかいうことではなく、命令が莫迦げているから従うということなのです。幾度となく語られたヨアンネス修道士の物語があります。ヨアンネスは自分の独房から非常に遠いところまで水を撒きに行けという命令を受けた。砂漠の真ん中に植えられた乾いた棒に一日に二回水を撒きに行けと言われ、彼はそのようにした。そのようなことをしても棒から花が咲いたりしなかったが、ヨアンネスの聖潔さは確保された。これはまた、気難しい師の試練でもあります。師は気難しければそれだけ感謝をあまり示さないし、弟子の服従に対して祝福することも少ないが、服従はそれだけに功德に値するものと見なされるのです。そして最後に、これは法との断絶の試練でもあります。つまりその命令が、法と見なされうるものに反するものであるときにも従わなければならないということです。ルキウスの受けた試練が『ラウソス宛の修道士史』に物語られています。ルキウスは多くの試練を受け

ますが、最後に、河に行つて息子を溺死させよという試練がありました。ルキウスは、命令は遂行しなければならぬので、実際に河に息子を溺死させに行きました。つまり、キリスト教的服従（牧者に対する羊の服従）は、「ある」個人の別の個人への全面的服従なのです。そもそも、従う者（命令に服従する者）は「スプデイトウス」と呼ばれます。つまり文字どおりには、誰か別な者に捧げられ与えられている者、全面的にその誰か別な者の意のまま、意志のままになる者ということです。それは、全面的な服従関係です⁽¹⁰⁾

キリスト教社会において、人は何かを信奉するがゆえに誰か他の者に従うのではない。言い換えるならば、ある種のドグマゆえに人に従うのではなく、ドグマ的に人に従うからこそ種々の規則への服従が生み出されるのである。盲目的かつ恒常的に人に従うというその点において、キリスト教徒は古代ギリシア・ローマの賢者たちとは別の道を往く。古代人たちは理に適った命令に一時的に従うのみであり、それゆえ羊飼いの比喩が彼らには殆ど通じなかった。それに対し、キリスト教社会では「迷える小羊」を含め、群れから完全になる契機はない。つまり、我々の目は、無条件に服従する滑稽なさまが見えなくなるまで群れから離れたことが一度もないのである。

そこが修道院であれブラック企業であれ、無条件に服従する者たちの姿は、なるほど涙を誘う哀れさを伴うものの、実際は動物学的に滑稽である。過労死を遂げた日本人労働者は、その点において誰もが例外なく「ヨアンネス」の名に並び称せられるほどの滑稽さを体現していた。「死」とはこの場合、病死でもなければ事故死でもなく、況んや戦死でさえもなく、ただ命を捨ててまで人に従った者が辿る哀れな末路であり、生命よりも人の命

令に従うことを優先したがゆえの必然的な結末である。我が子を過労死で失った者たちの名もまた、我が社会の原理に子どもを差し出したという点において、例外なくルキウスの列にあつて、カッシアヌスの書物に付け加えられるべき榮譽に浴していると言えるだろう。

ただし、日本の労働者はその帰結をもつて、神の国への切符を手にしたわけではない。そうではなく「全面的依存」が社会編成の原理となつて以降、ありとあらゆる場面で資格を取得する資格のありやなしやの試験を受け続け、その種の資格の制限のない広がりとし細分化の中をかい潜るようにして生活しているのである——死ぬまで続く試練の中を。

註

- (1) (公式ブログ URL:<http://ameblo.jp/koizumi-nitsuo/entry-11545371158.html>)
(公式ブログキャッシュ: <http://megadodon.jp/2013-0607-0824-01/ameblo.jp/koizumi-nitsuo/entry-11545371158.html>)
- (2) 「2ちゃんねる」に立てられたスレッドの書き込みのコピペブログである「ハム速」(URL:<http://hamusoku.com/archives/7913267.html>) から抜粋。以下同様。
- (3) (<http://mainichi.jp/select/news/20130613k0000m040089000c.htm1?inb=fa>)
なお、この記事の数カ月後、経産省キャリアがさらに口汚い言葉を吐き散らしていたブログが発覚した。以下の記事を参照。「復興は不要だ」経産省キャリア官僚がブログ」(<http://www.yomiuri.co.jp/national/news/20130926-OT1T00534.htm?from=ylist>)
- (4) ミシェル・フーコー『社会は防衛しなければならない』石田英敬／小野正嗣訳、筑摩書房、二〇〇七年。二五三頁。
- (5) 同、三五八頁。

飢えた家畜どものサファリパーク

飢えた家畜どものサファリパーク

- (6) Tom Zoellner, "Uranium", *VKING*, 2009, p.253.
- (7) 死刑制度が犯罪の抑止力にならないのに無罪に終わった刑事罰の可能性が専門医に就く意欲に対する抑止力として十二分の力を発揮したことは銘記されてよい。刑事罰の可能性が働きかける動機の質的な違いを考慮すれば、この嘆かわしい事態の原因が分かるはずだ。医学部に入學し、勤務医となって、患者の希望を十二分に適えようとして高難度の手術に臨む医師の努力が結局、刑事罰に結実する可能性の観点から、再び机に向かう受験生や、志望を決める医学生 of 立場に身を置いてみるがいい。破滅の可能性が高い努力を十数年に互って研鑽しなければならぬことを考えれば、目先の大金や抑えがたい憎悪といった単純な動機とは全く比較にならない重層的な階梯がそこに控えているのが分かるだろう。
- (8) 矢野経済研究所、受講料売上ベース（二〇一一年及び二〇一〇年）。
- (9) ミシエル・フーコー『安全・領土・人口』高桑和巳訳、筑摩書房、二〇〇七年。二二七頁。
- (10) 同、二一八―一九頁。